

ディケンズと教育

——師範学校制度批判の構図——

青 木 健

ディケンズは、多くの小説、自ら編集した週刊誌、講演、書簡などにおいて教育問題に強い関心を示したばかりでなく、時には、現地の学校へ赴き視察・調査を行うなどその熱意は並々ならぬものであった。小説では、さまざまな種類の学校や授業風景、またそれらで教鞭をとる教師が描かれており、週刊誌や講演では、より直接的に教育に関する見解が披瀝されている。ディケンズが描いた学校、あるいは彼が言及した学校はパブリック・スクールなどのエリート校ではなく、主として民衆のための学校である。老女が経営する私塾(dame school)、貧民学校(ragged school)、慈善学校(charity school)さらに男女それぞれの寄宿学校(boarding school)に至るまで民衆のためのさまざまな学校が対象となっている。ディケンズが描くこれらの学校で教える教師は多くは不適格者である。善意の人であるが適切な教授法を持たない教師、営利目的のためにのみ学校を経営し、生徒を苦しめる悪徳教師、同情心に欠け子供の想像力を押しつぶす教師等、多くは正しい教授法や指導法の知識をもたない、あるいはそれらへの関心もない教師たちである。彼らについては、それぞれに検証すべき問題はあるが、本論では、民衆教育に対するディケンズの姿勢を二つの作品(『辛い世』*Hard Times*, 1 Apr.-12 Aug., 1854及び『我らが互いの友』*Our Mutual Friend*, May 1864-Nov., 1865)で描かれた教師(前者ではマッチョーカムチャイルド、後者ではヘッドストーン)の分析を通して検証してみる。

二つの作品に描かれる教師は、師範学校(normal school)という新制度のもとで創設された教員養成の専門的学校を卒業し、教授法その他の専門教育を受けた教師と思われ、その意味では適格者と言える。彼らに対するディケンズの批判の根拠とその妥当性、批判の背後にあるものを、当時の新しい教育体系であった師範学校制度の設立事情及びその理

念等と対照させながら考察し、作品解釈に新たな光を当てることを目指したい。

1. 師範学校出身の教師像 (1) ——『辛い世』の場合

ディケンズの他の小説に見られるように、『辛い世』でも時事的問題が全編に張り巡らされており、テーマ、物語構成、人物造型に影響を与えている——師範学校制度、プレストン・ストライキ（1853—54年）、離婚法改革、実用技芸局批判等。とりわけ、物語冒頭で暗示される教育問題は、問題それ自体の意味のみならず、作品のテーマ及び物語の流れと大きく関わっている。冒頭で描かれる学校ではマッチョーカムチャイルド（M'Choakumchild）という意味深長な名前の教師が教えている。この名前に込めたディケンズの明白な意図として、一つはスコットランド系の名からこの人物がスコットランド出身らしいこと、二つ目は「チョーク」（choke＝窒息させる）と「チャイルド」（child）との類音から「子供の想像力を窒息させる」という連想を用意していることである。

教室では「男女児童が真ん中に狭い間隔を置いて二つのグループに分けられて、階段教室に固まって着席していた」（第一部第二章）¹⁾とあり、教師一人が一斉授業を行っている。この学校は工業地帯の地方都市にあり、貧民学校や救貧院附属学校（workhouse school）よりレベルは上の学校と思われ、師範学校出の若い教師が教えるのに適した学校といえる。しかし、この学校では明らかに暗記による詰め込み教育を施して子供の自由な想像力を阻む教授法が進められている。物語は次のような台詞で始まっている。「事実だけが人生で必要なのだ……それ以外のことは、この児童たちに何の役にも立たない……これこそ、子供たちを教育する際の原則なのだ」（第一部第二章）。この教育哲学は、この学校の財政的支援をしているグラッドグラインド（Gradgrind）（「グラインド」（grind）は「すり碎く：心身を痛めつける」の意）の教育方針を表す考え方である。特別参観日にあたるのか、教室にはグラッドグラインド、マッチョーカムチャイルド先生、そして名前を明示されない「三人目の紳士」が「小さな水差し」に喩えられた生徒たちを威圧している。教師を差し置いてまず、グラッドグラインドが生徒たちに口頭試問を課す。

最初曲馬団の娘シシィ・ジュープが馬について質問される。

「少女組の二十番」グラッドグラインド氏が言った。「父親の職業は何かね」

「はい、馬乗りの曲芸が商売です」

「……それでよい。お前のお父さんは獣医で、馬の医者で、馬の調教師じゃ。いいか、では馬の定義を言ってごらん」

(シシィ・ジュープはこの注文にすっかり驚いてしまった)

「少女組の二十番は馬の定義ができない！」グラッドグラインドは言った。……

「少女組の二十番は動物のうちで一番ありふれたものについて、何の事実も知らんようだ。誰か男子に馬の定義をしてもらおう。ビッツア、お前がいい」……

「四獣足、草食獣、四十本の歯、つまり二十四本の臼歯と四本の犬歯、それに十二本の門歯。春に毛が抜け、沼の多い地方では蹄も抜け落ちます。蹄は堅いけど蹄鉄を打つ必要があります。年齢は口の中の斑痕でわかります」こんなふうに（いやそれ以上に）ビッツアは言った。

「さ、少女組の二十番」とグラッドグラインドは言った。「馬とはどんなものかわかっただろう」（第一部第二章）

馬の定義に当惑するシシィに対して、関連性に乏しく理解不可能な定義によって、知識をひけらかすビッツアに教師も参観者たちも満足気である。マニングは『ディケンズの教育観』の中で「[[これは] メイオウ兄妹とペスタロッチの亡霊である」²⁾と言っている。ここではペスタロッチがスイスで唱道し、その学徒としてイギリスにメイオウ兄妹が広めたといわれる「実物教育」(‘object lesson’)が「定義で満たすこと」へと矮小化されている。兄チャールズ・メイオウ(Charles Mayo, 1792-1846)はペスタロッチの教育理論をイギリスに導入したことでも知られた教育者だが、彼が心酔した理由は次のような点にあったという。「[[ペスタロッチの方法は] 子供たちの幸せに対する同情溢れる関心と融合しており、その訓練の仕方は慈愛に満ちていた。それは子供の自然な経験に基づいていて、能力に見合う、発達段階に応じたものであった。具体

的な物の学習から始めて、少しずつ難しい抽象的な考えに進むことによって、子供の精神を開いて行くというものであった」³⁾。この教育理念に何の問題もない。しかし、それを応用してイギリス流にアレンジした時問題が起きたと考えられており、一般には、妹のエリザベス (Elizabeth Mayo, 1793-1865) が著した「歪曲された解釈による」『実物教育』 (*Lessons on Objects*, 1831) が大きな影響を与えたと言われている⁴⁾。マニングはこの著書にある牡蠣の解釈の例をあげ、物から定義へと進むのではなく、定義が優先され、そのため正しい手順が脱落してしまい、「一連の過程は教師側の都合のよい一方的定義の説明で終わり、[ピッツアの馬の定義と同様に] 生徒の負担を決して軽くしない」としてその教授法を批判している。さらに、「独創的な想像力」に対して「実用性や有用性が実質的に優位に立つものである」という形式を重んじる姿勢を指摘して、彼女たちの姿勢が「真のペスタロッツ精神に影を落とすつつあった」と述べている⁵⁾。

ディケンズはその鋭い嗅覚によって、「実物教育」が形骸化されていることを認識していたと思われる。『ニコラス・ニクルビー』 (*Nicholas Nickleby*, 1839 第七章) でヨークシャーのスクィアズの学校で行われていた、歪曲された「実物教育」の例を既に描写しているディケンズは、誤用された「実物教育」を再び諷刺することで、『辛い世』のテーマの一つ——功利主義的実用主義と、感覚や心で得たもの (想像力) との対比——を浮かび上がらせている。物語ではこのような教育理念の結果として、子供の個性の発達が歪められ、複雑な社会の中で有意義な人生を送るのに失敗する若者たちの姿が描かれる。グラッドグラインドの娘ルイーザは三十歳年上で成金のバウンダビィと愛のない結婚に身を委ねることになった時、結婚を強いた父親に向かって言う。「私の心はどんな経験をしたことでしょうか……あまりにもお父様が私に用心して下さったので、私は子供らしい心を持ったことはありません……子供らしい夢を持ったことはありません。子供らしい信仰も恐怖心も持ったことはありませんもの」 (第一部第十五章)。娘が言った言葉の本当の意味を父親が知るのには、彼女の結婚が決定的に瓦解した時である。一方、息子のトマスも子供らしい自由な想像力を封じられた結果、性格の歪んだ少年となり、ついには盗みを働くまでに堕ちてしまう。彼もまたある意味で父親の生かじりの教育哲学の犠牲者と言える。他方、「少女組の二十番」と

非個人的に呼ばれた曲馬団の娘シシィ・ジュープの心は、大量の事実を貯めることができないが、子供らしい想像力を十分に羽ばたかせて、父親との暖かい交流の中で少女時代を満喫する。ディケンズ得意のお伽噺や空想物語を通して父娘のきずなは強められる。事実中心の「功利主義」vs「想像力」の周りにさまざまなエピソードとイメージが配され、その結果への道程が物語の主要な流れの一つになっている。

冒頭で暗示される教育問題に関しては、さらにマッチョーカムチャイルドやグラッドグラインドたちが唱える教育理念を通して、当時の教育体制に諷刺の鋭いメスが入っている。ここでは師範学校制度がその対象となっている。『辛い世』の中でディケンズはマッチョーカムチャイルドが師範学校出身の教師とは言っていない。しかし、彼に関するディケンズの描写はそれを指している。以下それを明らかにするとともに、ディケンズの意図をさらに探してみる。

教員養成を目標とした官製の師範学校制度の成立事情は概略すると次のようになる。1846年さまざまな障害を乗り越えて、枢密院教育委員会(The Committee of the Privy Council on Education)は教育局長ケーシャトルワース (James Kay-Shuttelworth, 1808-77) 主導のもと、師範学校制度(normal school system)を立ち上げた。1853年「女王給費生」('Queen's Scholar')の制度が確立し、彼らを含む第一期の師範学校卒業生がこの前後正式な免許を受けた教師として各学校に配属された。彼らは新たに選ばれた者として、師範学校在学中から国庫補助を受けるだけでなく、「師範学校を卒業後教職に就いた者には、給料の特別増俸が認められた」⁶⁾。当時彼らの存在は、師範学校という新しい教員養成制度の成果に人々がどのような評価を下すかという点で注目の的でもあった。長年にわたって不適格な教師を弾劾してきたディケンズが関心を払わないわけではない。『辛い世』では、標的としてマッチョーカムチャイルドが選ばれる。彼は次のように紹介されている。

彼とおよそ140名ばかりの教師たちは、同じ時に同じ数だけのピアノの脚のように、同じ工場で、同じ原則に基づいて造られ、つい最近、世間に出されたのであった……正字法、語源論、文章論、韻律学、伝記、天文学、地理学、一般宇宙構造論、複比例、代数、土地測量と水準測量などの諸学。声楽、写生画などについて刻苦勉励し

て完全にこれらに精通していた。彼は困難に打ち克ちながら女王陛下の枢密院講義概要B表の学習へと進み、数学、物理学、フランス語、ドイツ語、ラテン語、ギリシャ語の高等部門でその精華を我がものにしたのであった。彼は世界中の（それがどのようなものであれ）すべての分水界について知っていたし、あらゆる国民のすべての歴史について、あらゆる川や山のすべての名前、あらゆる国の産物、風習、習慣について、羅針盤の三十二方位上のあらゆる国境や位置について知っていた。（第一部第二章）

上記の記述は、師範学校出の教師としてのマッチョーカムチャイルドについてある程度明らかにしてくれる。『辛い世』が1854年に『ハウス・ホールド・ワーズ』（*Household Words*, 1850-59）誌上で連載されたこと、1853年前後に師範学校第一期生が卒業したと合わせるかのように、「彼〔マッチョーカムチャイルド〕とおよそ140名ばかりの教師たちは、同じ時に同じ数だけのピアノの脚のように、同じ工場で、同じ原則に基づいて造られ、つい最近世間に出されたのであった」という記述があるところから、マッチョーカムチャイルドは師範学校第一期生と言わぬまでも初期の卒業生と考えられる。彼が「進んだ」とされる「女王陛下の枢密院講義概要B表の学習」とは「1846年に制定され、毎年教育実習生が教員資格取得のために学ぶべき諸科目を規定した表」⁷⁾で、いわゆる教員免許のための必修科目であろう。その他、彼が修得したとされる科目が連綿と続いているが、師範学校出身の教師はこのような学識を實際要求されたのであろうか。それとも、この教師独自の資質というのであろうか。あるいはディケンズ流の誇張の表れであらうか。これを明らかにするために、師範学校制度の理念と学習体系をさらに追ってみたい。

国家による教員養成計画は、さまざまな曲折を経て1846年に師範学校制度として樹立されたこと、推進したのは、1839年に勅令によって設立された枢密院教育委員会であり、その際初代教育局長（The First Secretary）として任命されたシャトルワースが積極的にこの制度を実行に移したことは前述した通りである。彼はそれ以前にさまざまな「報告書」と「覚書」を通して民衆教育における教員養成の重要性を主張していたが、国立師範学校設立案が、主として国教会及び非国教会双方の強力な反対を受けて挫折した時、私費を投じてロンドン郊外のバター

シーに師範学校（バターシー校、1840年）を創設し自説を実験校で実現させた。結果的に彼の師範学校は財政的行き詰まりから挫折するが、彼の実験校は大きな刺激となって、教員養成としての師範学校構想は維持された。シャトルワースは、前年（1839年）ヨーロッパ諸国を視察したが、特にスイスでペスタロッチの教育哲学に触れ、その伝統を受継ぐ学校で教員養成制度に組み込まれた独特の制度を見学し、これに強く感銘を覚える。

帰国後シャトルワースはノーウッドの「救貧院附属学校」で、実験的に生徒の中から優秀な生徒を助手に採用して教師の手伝いをさせた。教室は40～50名の生徒に限定し、一人の教師が一斉授業を行う。助手は所定の時間と科目を学習に当てる生徒であり、同時に教師の役割を果たしたことから「見習生」（‘pupil-teacher’）と呼ばれた⁸⁾。これらの見習生は一定期間後、助教諭として貧民学校や W. H. スクールの教師となる者もいたが、熱意のある者に高次の教育を受けさせる制度を模索したシャトルワースは、前述通り私費を投じてバターシーに師範学校を設立し、師範学校制度の基礎を築く。彼の努力が認められ、政府はさまざまな規定を設けて、1846年に正式に師範学校制度を樹立する。師範学校生は基本的に見習生の中から（見習期間は5年）選ばれ、師範学校で3年間の教育を受ける。師範学校生は「女王給費金」（‘Queen’s Scholarship’）の給付などの特典を受ける代わりに、厳しい学習と試験が課せられた。シャトルワースの「バターシー校」の日課表では、毎週各科目の試験が実施されている⁹⁾。教員採用の際にも、当然試験が課せられた。ディケンズは『辛い世』執筆にあたり、『ハウスホールド・ワーズ』の助手ウィルズ（W.H.Wills, 1810-80）に宛てて「これから着手する作品の資料に教育局が出している教員採用試験の質問集シリーズが欲しい。入手できないか」¹⁰⁾と問い合わせの書簡を書き送っている。実際の最初の公開教員免許試験は1848年に実施された。

枢密院教育委員会においてシャトルワースが中心となって書かれた1846年の「覚書」には、師範学校制度のさまざまな規定が盛り込まれていたが、その中に見習生から師範学校へと進学するための条件としての学力について言及がある。まず、「見習生は13歳以上、本人と家族の道徳的性格が優れている」こと、その上で次のような学力が要求された。

- (1) 正しい綴りと区切りで書き取りができること。話法の部分を指摘できること。正しく流暢に読めること。
- (2) 初歩の計算ができること。度量衡を覚えていること。
- (3) 地理についての初歩的な知識があること。
- (4) 教義問答を復唱し、かつその意味を理解し、聖書の由来の概略を知っていること。
- (5) 視学官が満足する程度に、下級クラスの授業を行うこと。
- (6) 女子はこれらに加えて、上手に裁縫と編み物ができること。¹¹⁾

以上は、見習生となるための学力基準である。初歩的な読み書き、単純な算術、地理的知識、宗教的知識（女子はさらに裁縫と編み物）に関する知識が必須となっている。見習生は5年間教育を受け、一定水準以上の学校で採用されるか、師範学校への進学が許された。師範学校進学者のうち成績優秀な者は「女王給費生」として奨学金の給付を受けた。5年間の見習期間に修得すべき学業水準はさらに上がって次のようになっている。

- (1) 教授法に関係ある題目についての論文作成。
- (2) 代数の基本、または土地測量及び水準測量の実習。
- (3) 文章論、語源学、作詩法。
- (4) 地球儀の使用、またはイギリスの概略と結び合わされた大英国及びヨーロッパの地理。
- (5) クラスの授業を遂行する能力。¹²⁾

見習生としての5年間に上記の学習課程が要求されたが、これらの教科目とマッチョーカムチャイルドが精通しているとされる科目を比較すると、前者では外国語が欠け、後者では宗教科目が欠けている。宗教教育は救貧院付属学校でさえ行われていたことを考慮するなら、マッチョーカムチャイルドが学習していないはずはない。宗教科目は必須科目の筈である。なぜディケンズは宗教科目を省いたのであろうか。後述するように、師範学校の目標としてシャトルワースは学生の性格形成を重要視し、学習内容に工夫を凝らした。当然そこでは宗教的科目は重

要科目となっている¹³⁾。ディケンズがマッチョーカムチャイルドの学習内容から宗教科目を外した理由は精神的修養の欠落を暗示することにあっただのかもしれない。また、彼にはさらに3年間の師範学校での学業が待っていたのである。外国語科目や古典語はそこで修得したのであろうか。また「彼は……女王陛下最高枢密院発表の第二号人名録に秀才の名を留めることができた」とあるところを見ると、彼は「女王給費金」を給付された優秀な師範学校生であったことになる。以上の検証から、マッチョーカムチャイルドが修得したと思われる科目の種類及び数は、実際の師範学校生の場合と比べ突出しているわけではないこと、彼が成績優秀な卒業生であったこと等が分かる。

問題は教師となった時の彼の教授法である。グラッドグラインドの「事実重視」の教育理念に対応するように、マッチョーカムチャイルドの教授法についてディケンズは次のように茶化している。

彼は、『アリババと四十人の盗賊』に出てくるモルギアナさながら、手始めにこの予備授業に取りかかった。彼は目の前に並べられた児童という容器全部を、一つずつ覗き込んで、中に何が入っているかを知ろうとした。ああ、善良なマッチョーカムチャイルドよ。君の煮えたぎる知識の蓄えを壺の中に注ぎ込んで次から次へと縁までやがて一杯にしてしまう時、君は壺の中に潜む盗賊である「空想」をいつでも即座に殺してしまえると思うのか——でなければ、ときどきは盗賊の体を不具にして、その姿を歪めるだけに終ることが分かっているのか。(第一部第二章)

容器に喩えられた生徒の頭の中に知識を注ぎ込み、子供らしい「空想」を押し殺すのが彼の教え方だという。当時の師範学校出身者の教授法について、コリンズは賛否両論を用意してディケンズの皮肉の正当性を推量している。ディケンズによって表明されている懸念は、視学官、一般の学校長、それに師範学校の校長たち等、専門家の間のみならず、一般の人々にも当時あった不安であるという。ある師範学校長の次のようなコメントが引用されている。

学生が、修得するよう求められている科目配置を見てみましょう。

その内容も科目数も、ともどもに現在の師範学校で追及されている課程は、能力を開発したり精神を鍛えることよりも知識を与える傾向にあることは、一目瞭然です。記憶することに最大の努力が要求されており、判断力とか思考力増進のための配慮はほとんどなされていないのです。非常に意味深長でわかりやすい言い方をすれば、師範学校でなされている学習課程の大きな特徴は、詰め込み教育なのです。旧約聖書史、教会史、英国史概論のような科目では、理解するのではなく、ただ覚えなければならない名前や日付や事実ばかりが、むやみに溢れかえっているのです¹⁴⁾。

ディケンズが喜びそうなこの感想は、視学官たちの不満でもあった。後に視学官として活躍したマシュー・アーノルドもその一人だった。「彼ら〔学生たち〕は、事実には圧倒されてしまい、種種雑多な事柄の表面で遊んでいるだけで、何も身につけていない。彼らの記憶は、不健全な形で刺激され、判断力の方は、つまずいて頓挫してしまったのである」¹⁵⁾。

しかし、コリンズはマッソーカムチャイルド的姿勢に同情的な見解も紹介して、バランスをとっている。「1846年から62年頃の教師たちが、どんなに強く知識を獲得したいと望んでいたかをわからなければ、彼らについての理解は始まらない」という見解を述べた後、さらに、「彼〔ディケンズ〕は、制度の生み出したものを、一種嫌悪感をもってみるとともに、その動因——個人的なものであれ、制度的なものであれ、その多くは立派なものだったにしろ、結果的には好ましいものを生みなかった動因——を理解しようとはしない」¹⁶⁾と言って、ディケンズの形式的な中産階級的なものの見方を批判している。それはディケンズの中産階級的姿勢に基づく偏見として他の側面にも見出されるものである。

コリンズの言う「制度的〔に〕立派なもの」とは具体的にどのようなことを指すのか不明だが、師範学校の教授法に関しては優れた理論が用意されていた。バターシー師範学校を創設した際のシャトルワースが推奨した教授法に関する見解を見てみよう。

理解されないものを記憶に詰め込ませるような授業が行われながら、相互の寛容や善意の行為、及び教授者への愛情を児童に育むことを期待するのは空しいことである。なぜならば、教師はそのような教

授法によって、知識からそれ自体の魅力を奪い取り、罰の恐怖と報酬の期待とによって心の傾注を強要する必要に遭遇するからである……。これとは逆に、学習が児童の主要な悦びとなるような方法で教授された場合、児童と教授者との間には調和が生じ、児童の魂と接触する教師の精神は単なる知識の厳選ではなくして、正しい宗教的・道徳的感情と動機の源泉となり、かくして一日の課程の交わりにおいて、児童は教師の周りに一家族のメンバーとして成長する¹⁷⁾。

前半部分はあたかもマッチョーカムチャイルドの「詰め込み教育」による悪しき授業の結果を予言しているかのようなものである。後半部はディケンズの満腔の同意が得られそうであるが、では、「児童の主要な悦びとなるような」授業方法とはどのようなものか。シャトルワースはそれを「総合的方法」(‘synthetic method’)と呼ぶ。それは「児童の側に分析の努力を要求せず、一般的事実の出所である諸要素を熟知させ、その結果一般的事実の知識に至るような漸進的段階によって、教師が児童を既知のものから未知のものへと導くことを意味する。この方法が一斉授業法と結合して使用される時、知識の修得はその自然な吸引力を与えられ、児童の努力は温和で説得的な性格をもった教師の努力を熱心に補い、結果として、あまりにも広く普及している強制の実践をなす必要をなくする」¹⁸⁾。この理念は、現代の「総合学習」や「合科教授」とつながる要素を多分に含んでいる。

シャトルワースの言う「総合的方法」は、言うまでもなくペスタロッチの教育理論と深く関わっている。実物教育とペスタロッチとの関係を彼は次のように認識していた。「ペスタロッチは、感覚に直接触れさせることによって、児童が後に言葉で叙述する特質を認識するように彼らを導くために、実物に基づく教育を考案することに意を注いだ……。[単なる知識の暗記ではなく]、事物に対する明確な知覚と心からの確信を児童に与えることにより、真理の記号としての言語の認識へとつなげる」¹⁹⁾。詰め込み授業を廃し、漸進的な知識の修得の可能性を目指すこの教授法は、戸外での作業や実習校での技術の実習を重要視する「実物教育」を基本に児童生徒の積極性を引き出す方法であり、生徒の実際的な有用性の感覚を育てるものであったようである。シャトルワースは師範学校の理念として、さらに生徒の性格形成を目標の一つにあげ、人間性

の重要性を教員養成の重要課題としているが、それはあらためて論じるとして、ここではマッチョーカムチャイルドの描写が、修得した科目については現実の師範学校出身教師の特性とそれほどの乖離はないことを当時のさまざまな証言と記録が証明している点を指摘しておく。しかし、シャトルワースの教育理念とその実践の実態を検討してみると、制度的には画期的なものであり、ディケンズの批判は必ずしも妥当とは言えない。

マッチョーカムチャイルドに対するディケンズの皮肉は、その名の接頭辞に暗示されているスコットランド的性質にも及んでいる。コリンズは、「たぶん、当時のわが国が、スコットランド出身の資格のある教師たちを大勢雇い入れたという事実を示しているのもであろう」²⁰⁾とだけ言及しているが、なぜスコットランドなのであろうか。背景にある教育に関する時事的問題を明らかにする必要がある。

ディケンズは師範学校制度創設に尽力したシャトルワースの教育行政に最初は賛同する姿勢をとっており、「一緒に貧民学校のモデルを創ろうではありませんか」²¹⁾とまで言って感動的な書簡を書き送っていた。「ディケンズは1846年彼の知己を得て、彼と貧民学校への関心を共有し、彼に共鳴していた。[しかし、] シャトルワースが進めた教育方法、視察制度、教員養成等の問題でディケンズは否定的態度をとるようになった」²²⁾。1856年頃には「シャトルワース的ナンセンス」(‘Shuttleworthian nonsense’)²³⁾と言って彼の教育行政を非難するようになっていた。因みにシャトルワースはランカシャー州出身であるが、エディバラ大学を卒業するなどスコットランドと深い関わりを持っていた。教育局長に就任以前に彼は「救貧法補助委員」に任命され(1837年)、各地の救貧院を視察する中で、救貧法の適用を受ける児童の教育問題に関心を払うようになった。その最初の教育視察を行ったのがスコットランドであるが、ここで彼は二つの学校を視察して衝撃的な経験をする。「ウッズの Sessional School とストウ(David Stow, 1793-1864)の Model and Normal Seminary を見学し、多くの進歩的な教育方法を学ぶことができた」²⁴⁾からである。

「進歩的な教育方法」とは、それまで民衆教育の中心的役割を果たしてきた二つの宗教団体——「内外学校協会」(British and Foreign School Society, 1808年創設)と「国民協会」(National Society, 1811年創設)——

が普及させた慈善的学校（voluntary school）で行われていた「助教生方式」（‘monitorial system’）に替えて、有能な助手を養成し、彼らの援助のもとで人格的教育を目的とした授業方式を指している。教師は自分の教える教科のことだけでなく、中心的な目標として性格形成のために道徳的・宗教的教育を重視すべきとされた。この教育目的に沿って、ストウのセミナリーには教員養成のための学校が設置されていたという。シャトルワースはこのスコットランドの学校視察から教員養成のための独自の師範学校構想を得たと後に回想している²⁵⁾。つまり、当時スコットランドの民衆教育は、ある面でイングランドのそれより優れていたことになる。マッチューカムチャイルドのスコットランド的意味はそういった点も含まれると思われるが、選ばれた教師として彼の学識は十分であった筈である。問題は事実重視の「詰め込み教育」という彼の教授法と生徒への接し方にあるというのがディケンズの批判であった。

2. 「第三の紳士」と視学官制度

ディケンズはマッチューカムチャイルド紹介の中で「もし彼にもう少し学問がなかったなら、もっともっと多くのことをどれほど立派に教えることができたであろう」（第一部二章）と皮肉っている。彼の教授法は「煮えたぎる知識の蓄えを壺〔生徒の頭〕の中に注ぎ込んで……縁まで一杯にして……『空想』を殺してしまう」（第一部第二章）という事実一辺倒の方法である。この教授法は同席している「第三の紳士」も共有する教育哲学である。名前は明示されないが、彼はグランドグライントに続いて生徒たちに質問を浴びせる。再びシシィ・ジューブが犠牲になる。彼女は部屋に花の絨毯を敷き詰めたいと言う。男は問い詰める。

「……どうしてかね」

「はい、花が好きですから」と少女は答えた。

「するとお前さんはそういう理由で、花の上にテーブルや椅子をのせたり、重い靴を履いた人々に歩かせようというのかね」

「はい、でもそれは別に花を傷めたりはしません。花は踏まれても萎びません。それは大変きれいで気持ちのよい花かもしれません。わたしは、あの空想で……」

「まあ、まあ。でもお前は空想なんかしてはいかんぞ」と紳士は、彼女の言葉がうまい具合に自分の思う壺にはまったので、嬉しそうに「そうじゃ、お前は空想なんかしてはいかんのじゃ」と叫んだ。
(第一部第二章)

「空想」の意義を否定し、「事実、事実、事実」と叫ぶこの紳士は「何事においても、君たちは事実で指導され、支配されなければいけない」と言ってグラッドグラインドの見解を追認している。この人物はその後登場しないが、ディケンズがこの男に込めた諷刺は予想以上に根深い。彼は「すべての事柄を無味乾燥にしてしまう点では大した男であった。政府の役人で、彼なりの流儀で……精力的な論客だった」(第一部第二章)と皮肉られている。政府の役人がなぜこの学校に来ているのか。やり取りをみるとグラッドグラインドに対して対等以上の態度をとっている。コリンズは K.J. フィールドイングの詳細な調査を踏まえて、この人物が「実用技芸局」²⁶⁾と関係があり、「実用性」を工業デザインに応用しようとしたヘンリー・コール (Henry Cole, 1808-82) を揶揄したとしている。私見では、ディケンズの意図はもっと深いところにあったと思われる。師範学校制度に関わる視学官制度批判である。さらに、コリンズは「工業都市にある学校の情緒的、美的不毛さを……功利的な考え方の不毛さ」²⁷⁾と結びつける例としてこのエピソードが描かれたとしている。しかし、「政府の役人」はマニングが言うように「実用技芸局の管理者であったヘンリー・コールという人物に、視学官像が加わった」²⁸⁾と解釈した方が妥当と思われる。

ディケンズがシャトルワースと袂を分かつことになった原因の一つに「視学官制度」(‘system of inspection’)があることは既に触れた。1846年の正式な師範学校制度の創設以前にこの制度は予備的に設立されており、イギリスの教育体系の中で重要な役割を演じるようになっていた。ディケンズがなぜ必須と思える制度を否定するような態度に出たのであろうか。それは彼の教育問題に対する限界を意味するのか、それとも鋭い洞察が込められているのであろうか。そのためにも「政府の役人」の裏に見え隠れする「視学官制度」について踏み込んで検討する必要がある。

19世紀イギリスの初期視学官制度は1833年に定められた「工場法」及

び1834年の救貧院法改正と深く関わっている。概観すると次のようになる。まず工場法は「連合王国の工場の児童及び青少年の労働を規制する法律」と呼ばれるように、児童工場労働者を保護する目的で成立されたものであるが、この法律が的確に執行されているかどうかを査察するために四名の査察官が任命された。この法律の成立に尽力し、査察官制度を立ち上げたのはベンサムの学徒チャドウィック (E. Chadwick, 1800-1900) と言われている。彼は1833年に王立委員会の委員に選ばれるや、法の執行にあたる機構の改革、とりわけ査察官設置の必要性を強調した。この査察方式の採用は、工場立法近代化への一転換点となったのみならず、児童労働者の教育を含む諸規定が、国家の監督の下で初めて実行力のあるものとなった点で教育立法の上からも注目に値すると言われている²⁹⁾。

救貧院法改正に伴う査察制度が工場法のそれと微妙に違うことは、多くの研究者が指摘している。ハリスによれば、正しい意味における査察制度は救貧法改正をもって始まるとしている³⁰⁾。工場法では地方行政の機構がまだ設置されず、組織化されなかったというのが理由である。またウェッブは救貧法改正が「本質的に異なった性格の査察方式を生み出した」³¹⁾と言い、それは友好的な態度で地方との協調関係を作り上げた、とその特徴を指摘している。1834年の救貧法改正でもチャドウィックが関わっている。彼は1832年に救貧院改正を検討する調査委員会の委員となり、「ベンサム方式」での救貧行政機構を提唱し、委員会の支持を獲得。1834年の救貧法改正では、彼の主張が大きく容れられ、次のような委員会機構が設置された。中央に三名の正式委員と九名の補助委員からなる救貧法委員会、地方に教区の連合体から選出された委員による地方救貧委員会である。査察業務を実際に担当したのは補助委員であった。彼らは「救貧区」(‘union’)の組織化を図り、行政運営の単位を作り上げると救貧行政の実情を調査し、中央の委員会に報告するという職務を担った。この補助委員の一人にシャトルワースがいた。

一方、査察制度を教育行政の領域への導入に尽力したのはシャトルワースと言われる。既に救貧委員会補助委員として各地の救貧院附属学校を視察して視学官制度の重要性に精通していたシャトルワースは、さらに枢密院教育委員会教育局長としてこの制度の充実を図った。教育問題における常套的な各宗派の妨害を排除、あるいはそれらと妥協しつつ

1839年には勅任視学官二名の任命にこぎつけると、翌年にかけて矢継ぎ早に視学官制度に関する諸規定を提示した。1843年には五名の視学官を加え、視察学校の増加に伴い視学官補を任命し、視学官に準じた査察業務を担当させた。査察業務は、政府補助を受けている学校を対象として、その施設設備、教授法、学級編制、出欠席率、財政、教員組織、教科書等の調査からなっていた。1846年には、視学官の権限を大幅に拡大し、各種の試験や認可証明に携わせることにした。同時に視学官の数も増員し、1850年にはその数は23名になっていたという³²⁾。したがって、ディケンズがウィルズに問い合わせた教員採用試験問題作成にも彼らは関わった可能性がある。

このような視学官の職務権限と査察の基本的態度はどのようなものであったのだろうか。視学官の機能が「調査・監督・助言・報告」であるとするなら、その態度は視察対象の学校関係者に対して厳格な姿勢が予想される。しかし、『辛い世』で「事実の詰め込み教育」を強いる「政府の役人」は、生徒たちには厳しいが、グラッドグラインド（学校のパトロン）やマッチョーカムチャイルド（教師）に対して、協調的な態度をとっている。これはどういうことを意味するのであろうか。現実にはシャトルワースを中心とした枢密院教育委員会は「視学官は学校設立者や教員と友好的な協調の関係を維持すべき」³³⁾という方針を打出していた。その裏には、視学官は統制や干渉の権限は与えられておらず、説得の方法を重んずべきであり、査察の目的は、援助すること、つまり教育の専門的知識や技術の助言にあるとするシャトルワースの懐柔戦術があった。

そのような読みがディケンズにあったのだろうか。私見では、「詰め込み教育」をパトロン、教師、そして「政府の役人」の間に一貫性をもたせることにより、教育体系、具体的には師範学校制度を諷刺しようとしたと考える。ボクサーに喩えられた「政府の役人」の紹介文は短いが、「全ての事柄を無味乾燥なものにする……精力的論客……役所にとっての偉大な黄金時代を築き上げる債務をお偉方から任されていた」（第一部第二章）等の語句は、想像力を締め出す（とディケンズは考えた）「実用技芸局」のヘンリー・コールにも当てはまるし、統制以外の何ものでもない（とディケンズは考えた）視学官制度推進の中心人物シャトルワースにも当てはまる。ユーモアと皮肉を込めたディケンズ特有の笑い

は見方を変えれば苦く複雑なものとなる。

物語冒頭で描かれる状況が物語のその後の展開やテーマを決定的にするというディケンズ特有の小説技法は、『辛い世』でも有効に使われている。冒頭に教育問題を置き、功利的実用主義 vs 想像力の対比を際立たせることにより、ディケンズは物語の流れの一つをその対比に即して進めて行く。物語が一貫性を持ち、ディケンズの作品の中では比較的まとまりのある作品となった要因の一つと言えよう。しかし、彼が掲げた教育問題の内実を現実の教育行政と照らし合わせて検討してみた時、それに対するディケンズの解釈の正当性には疑問を差し挟まざるをえない。もちろん、現実とフィクションの違いを考慮に入れなければならないのは当然である。それでもなおディケンズの姿勢は妥当性に欠ける憾みがある。それはこの作品で扱われる教育問題が、歪曲された教授法と視学官制度に限定されており、深みに欠ける点にも原因があるかも知れない。しかし、もっと大きな問題は、マッチョーカムチャイルドへの言及が冒頭の二章のみであり、彼の性格描写が欠落している点であろう。

3. 師範学校出身の教師像 (2) ——『我らが互いの友』の場合

『辛い世』の十年後に書かれたディケンズの『我らが互いの友』（以下『互いの友』と略す）でも師範学校出の教師が登場する。その人物の複雑な心理が物語の中で重要なポイントとなるという意味では、作品解釈上で教育問題は『辛い世』以上に大きな意義をもっている。ディケンズを再び師範学校批判に駆り立てたのは、1861年のニューカッスル審議委員会（1858年設立）の否定的な教育状況報告にあるとされる³⁴⁾。ディケンズはこの作品で師範学校制度批判の手を緩めるところか、さらに人間の心の奥に潜む複合的な心的葛藤を、特殊な社会的背景を持った人間、つまり師範学校出身の教師の心理を分析する中で見ようとする。ディケンズはそのような人間の弱点を暴き、それと師範学校制度との関係を執拗に追いかける。この作品では、『辛い世』で描かれた教授法や視学官制度などには直接触れられず、代わりに新しい世代の教師に関する「社会学的考察」³⁵⁾に焦点が当てられる。さらに言えば、師範学校出身の教師が抱く複雑な階級意識を軸に、彼の不安やその裏返しの虚栄心が、彼の関わる恋愛事件の中で描かれるのである。過去の自分を写すような少

年とその姉、そして上流階級の恋敵の男が入り混じり、物語は強い緊張感と言いいられぬ不安の中で進められる。教師の名はブラッドリー・ヘッドストーン (Bradley Headstone)。彼は次のような描写とともに登場する。

ブラッドリー・ヘッドストーンは、上品な黒い上着に黒チョッキ、上品な白いシャツ、上品な正式の黒ネクタイ、上品な霜降り模様のズボン、ポケットからは上品な銀時計がのぞき、それを吊る上品な毛編み紐が首から垂れている——どこからどこまでも上品な姿の二十六歳の青年に見えた。(第二部第一章)

「上品さ」(‘respectability’) のイメージ群で固めたこの人物描写の後で、外見とは微妙に違う彼の心理を通して、師範学校に対する教育批判が暗示される。マッチョーカムチャイルドの場合と同様、ディケンズは彼を師範学校出とは直接言っていないが、彼が師範学校出身者であることは次の描写でも明らかである。多くの知識を貯えた結果、「彼の頭は機械的な知識を収容しておく倉庫だった。問屋として小売商たちの需要にいつでも応じられるよう、頭の倉庫を整理しておく必要があった」(第二部第一章)。あまりにも多彩な学問分野を修得したため、教授するにあたって彼はそれらの整理に苦労している。「いろいろ取り入れるためにその分だけ抑えてきたものも多く、そのため彼の態度はどこか不自然で、それが際立った特徴になっていた」(第二部第一章)。マッチョーカムチャイルドに比べると落ち着きがなく、「上品な」外見とは裏腹に不安を抱えている様子が伺える。その不安は彼の出自にあった。彼は下層階級出身者で「生活保護」を受けて育ったから、本来なら「[水夫か漁師として]海に追い払われる運命に」あったかも知れないという。しかし、「刻苦勉励の結果」今やれっきとした師範学校出の教師である。そういう「彼にとって自分の育ちは、誇りでもあるとともに重苦しくも腹立たしく、なんとかして忘れてしまいたいものだった」(第二部第一章)。

ヘッドストーンの出自は例外的だったのであろうか。既に考察したように、師範学校生は成績優秀な見習生(‘pupil teacher’)の中から選ばれたが、その見習生は「救貧院附属学校の児童や教員の子女あるいは助教生の中から熱意・技術・学力・気質の温順さに秀でた者」³⁶⁾の中から

選ばれた。これからすると、少なくとも初期の師範学校生の多くは経済的に恵まれない下層階級出身者であることが分かる。したがって、ヘッドストーンの出自はかならずしも例外ではないと言える。彼が卑しい生まれから身を起し、努力して成功した裏には一族を見捨て、下層階級の妬みを買ったこと、辿り着いた地位も中産階級の偏見に晒されたことが仄めかされるが、具体的には明らかにされない。代わりにディケンズは彼の分身としてチャーリー・ヘクサムを描くことによって、ヘッドストーンの過去を暗示する方法をとっている。

チャーリー・ヘクサムは、テムズ河で死体を浚う仕事をしていた父に教育を拒否されたが、姉リジーに助けられ貧民学校にこっそり通っていた。この貧民学校は、男女共学で、生徒たちは「年齢別にいくつかの正方形に区分けされていた」（第二部第一章）ところから、マニングは「助教生方式」（‘monitorial system’）の学校であろうという。さらに、「半円形」でなく「正方形」に区分けされているので、「国民協会系の学校」と推測している。確かに、この学校には手伝いの助手がいるところを見ると、「助教生方式」と言えないことはない。ただ、助教生システムは1850年頃にはあまり行われなくなっていたこと、物語の時代背景は1861年頃と推定されるので、ディケンズのアナクロの可能性があるが、貧民学校の描写は迫真的である。ディケンズが現実に見聞した経験に基づいていると言われる所以である³⁷⁾。

幼いチャーリー・ヘクサムが初めて教科書で勉強した学校は……殺風景な路地裏のみじめな屋根裏部屋だった。部屋の空気はむっと鼻にきて、狭いところに生徒はすし詰、うるさく秩序もなにもあったものではなかった。生徒の半分は眠り込んでいるか、目は開いていても意識ゼロの状態、残り半分はものうげな音読を続けていて、それが……居眠り組の子守唄にもなっていた。先生たちを動かしているのはもっぱら善意だけで、教え方など全く念頭になかったから、折角の努力も……混乱を生み出しているだけだった。（第二部第一章）

クルックシャンクが1843年に描いた貧民学校の絵そのままの乱脈振りである。ここでも教師の無能ぶりが指摘されている。ディケンズが最初

シャトルワースの教育理念に共鳴したのは、貧民学校への共通の関心であり、1846年には貧民学校のモデル校創設について熱心に語る書簡をシャトルワースに書き送ったりしていたことは前述した通りである。ディケンズも、さまざまな貧民学校を訪れ、優れた教員の養成が急務であるという認識をもったと思われる。しかし、既に触れたようにその蜜月関係は長く続かず、ディケンズは「シャトルワース的ナンセンス」とシャトルワースが進める教育行政を批判するようになった。それではディケンズの側に民衆教育に関する新たな提案が用意されていたのであろうか。多くの研究者は否定的である。せいぜい批判の裏返しに彼の提案と言えと言えた。しかし、彼の攻撃は複合的で、諷刺の矢は四方に飛んでおり、読者の笑いも複雑にならざるをえない。

チャーリー・ヘクサムが通った貧民学校には年齢に制限がなく、幼い生徒も年長者もいた。ただ男女は別々に分けられていたと言っている。女子の教室では教訓的な童話に反応するよう強制されていた。

……教室中に滑稽なほど真面目くさった猫かぶりが行き渡っており、どの生徒も無邪気を装っていた。この見せかけの装いは、上流階級のご婦人方の参観者には好評だったが、無理やり作ったものだから、結果的には唾然とするほどばかばかしい現象が生じていた。下層生活には珍しくもない悪徳をたっぷり体験済みの若い娘が、『少女マージャリーの冒険』といった教訓童話に心を奪われ、「まあ面白い！」と感想を述べるのが当然とされていた。(第二部第一章)

「上流階級の参観のご婦人方」は寄付に応じたボランティアの女性たちであろうか。彼女たちは授業で道徳的物語が語られているのに満足し、参観を終えるのであろう。もともと教訓童話に強く反発していたディケンズは『靴二つちゃん』(*The History of Little Goody Two-Shoes*, マージャリーは主人公名)を槍玉に挙げて、偽りの道徳(と彼は考えた)を批判している。しかし、この児童物語は時代を風靡した作品であり、このような学校で読まれることに何の問題もない筈である。ディケンズの偏見的姿勢は明らかである。また、年長の生徒には聖書があてがわれるが、内容はおろか字句の読みさえままならないことを茶化して、貧民学

校での宗教教育を揶揄している。確かに、ディケンズが視察した貧民学校ではこのような状況が見られたであろう³⁸⁾。しかし、民衆教育の基本はキリスト教の基礎を教えることが伝統であったことを理解すれば、ディケンズの批判はかならずしも正当とは言えない。ただ「国民協会」や「内外学校協会」の宗教教育に対する一方的な姿勢に強く反発していた人々が多くいたことは知られている。

日曜日の夜に行われる授業はさらに一段と混乱を増している。授業方式も、正確には「助教生方式」(‘monitorial system’) と呼べないものである。

……日曜日の夜になると可哀想に幼年組の一隊の斜面板は、先生たちのうちでもとりわけ教え方の下手な、最悪の先生、つまりもっと年のいった生徒だったら我慢できないような先生の手引き渡されてしまうのだった。この先生はさしずめ主任執行吏とでもいった格で生徒たちの正面に立ち、その傍には世の学校の慣習通りに、有志の生徒が執行吏助手の形で控えるのだった。……ぼそぼそと喋り続けるのが主任執行吏の任務なら、眠っている子、あくびをする子、そわそわする子、泣きべそをかく子のところへすっ飛んで行って、その哀れな顔を引っこすってやるのがこの助手の仕事 [であった]。
(第二部第一章)

ディケンズは教室での助手の奮闘ぶりを通して「助教生システム」や「見習生制度」の諷刺を狙っているようである。助手は一般には教師の手足となり、学習を手伝うことになっているが、ここでは授業は崩壊寸前の状態である。前述したように、1860年代には「助教生システム」の例はあまり見られなくなったし、「斜面板」という表現から教室は「階段教室」で助手を使って教師一人が授業を行っていることから、1837年にシャトルワースがスコットランド視察で見聞したストウたちの授業方式に類似したもののものである³⁹⁾。チャーリー・ヘクサムはこの学校で助手としても働いていたことが次の皮肉っぽい記述で分かる。

こういう善意の殿堂においてさえ、並外れて頭のいい、並外れて堅い決意の子供は何かを学ぶことができ、学んでしまえば先生たち

よりずっと上手に教えることができるのだった。知識のほうが生
 たちよりもしっかりしている上に、先生たちと違って自分より頭の
 いい生徒を教えるという不利な立場に立たずにすむからだだった。そ
 んなふうにしてチャーリー・ヘクスムはこのごった返しの中で頭角
 を現し、このごった返しの中で教えて、このごった返しよりましな
 学校へ入れてもらえたのだった。(第二部第一章)

チャーリーは視察に訪れたヘッドストーンの目にその明敏さが留まっ
 たのであろう。ヘッドストーンは境遇の似たチャーリーの姿に若き日の
 自分を見出したと思われる。チャーリーはその後、見習生として5年間
 の訓練を受け、さらに師範学校へ進学するコースを辿る可能性と資質を
 もった生徒である。ヘッドストーンも恐らく類似のコースを辿り、今や
 十分資格をもった師範学校出の教師として前途は明るい筈であった。

ディケンズは師範学校制度が確立してほぼ十年後の教育環境をヘッド
 ストーンが勤める学校の素描の中で暗示している。その学校は、サリー
 州とケント州が接するテムズ河近くの低地帯にあり、その地方一帯に似
 たような学校が建てられている。師範学校卒の教師の採用先として次々
 と学校が建設されている様子がうかがえる。そのような学校は「型どお
 りのもので最新の機械主義に照らして建てられていた」。教育も「画一
 主義」に沿って行われている。ヘッドストーンはマッチョーカムチャイ
 ルド同様、師範学校で「教師としての知識の大部分を機械的に修得」し
 た挙句、「機械的に暗算ができ、楽譜を見てすぐ機械的に教えたし、各
 種の管楽器を機械的に吹くこともでき、あまつさえ教会のオルガンでも
 機械的に弾くことができた」(第二部第一章)。類似のイメージ群による
 ディケンズ得意の描写によってヘッドストーン及び学校の画一主義的・
 機械主義的性格が浮き彫りにされる。

チャーリーが次に通うことになったヘッドストーンの学校は、複式学
 級で女性の先生が女子生徒を教えている。その一人女性教師ミス・ピー
 チャーの出自は明らかではないが、女子師範学校卒業生の可能性は十分
 にある⁴⁰⁾。女生徒のメアリー・アンに文法構造を問い掛ける様子やどん
 なテーマでもきちんと収まるエッセイを書く能力、絶えず規則どおりの
 行動等からも、彼女もまた教師としては機械的な教授法に準じて教授し
 ているようである。しかし、人間的には「小柄で華やかで小奇麗で几帳

面な」独身女性であり、花壇の手入れを怠らず、ヘッドストーンへの想いを抱くなど女らしさを身につけた女性教師として好意的に描かれている。ディケンズの関心は、専ら師範学校出のヘッドストーンの性格造型に向けられている。

4. 師範学校における教員としての性格形成 ——『互いの友』との関連

ディケンズはヘッドストーンとチャーリー・ヘクサム描写を通して、貧しい家庭の子弟が受ける可能性をもった最良の教育の具体例を示したが、彼はそのマイナス面を強調した。コリンズは1853年にある教師が執筆した『教師の問題』と題する著作に言及し、教師が当面している困難として教師の社会的地位の問題が最も焦眉の問題であったことを指摘している。「教師とは、どんな使命をもった職業か、社会の中で位置決めをするとしたら、どのあたりに位置するのか……職人、商人、医者、牧師もそれぞれ社会の中で自分の場所と使命をもっているが、教師の居場所はどのあたりで、その使命は何か」⁴¹⁾。教師、特に公に認められた制度によって資格を得た師範学校出身の教師が自らの社会的評価を求めるのは当然の権利と思われる。しかし、階級社会の強固な壁はなかなか崩れない。貧しい家庭から見習生として、師範学校生として長年辛酸をなめた者にとって、努力せずに安定した地位を享受している上流階級出身者への嫉妬と怒りは抜き差しならないものがある。ヘッドストーンはパブリック・スクール出身者で恋敵でもある怠惰なユージン・レイバーンへ向かって、冷静を装いながら相手の非礼を強く非難する。

「あなたは、私のことを足下の塵よりも値打ちのないものと考えている」とブラッドリーは、ユージンに言った。注意深く言葉を選び、語調を計算しながら話をした。そうでないと話ができなかったからだ。

「先生、そのとおりさ」とユージンは答えた。「あなたのことなんか考えちゃいないさ」……。

「レイバーンさん、少なくとも私は、横柄な言葉や威張った態度ではあなたの足元にも及ばないことは分かっています……確かにあ

あなたは……私の出自を非難して、私の経歴をそれとなく仄めかしている。しかし、言っておきますが、私は低い生まれで育ちもよくない、しかしね、それにもかかわらず、そのどちらかから自分の努力で抜け出したんです。あなたなんかよりましな人間とみなされる権利があるし、誇るべき理由も多くありますぞ」(第二部第六章)。

両者の対立を構成している要因は複雑である。ヘッドストーンの怒りは、長年の奮励努力によってかちえた教師という地位も、出自が良いというだけの怠惰で依頼人もいない若い弁護士に社会的・知的・心理的に負けているという意識が底流となっている。さらにそのような男が恋敵として自分より優位に立っているという屈辱感が加わっている。ユージンは尊大で、恋敵を教師風情と嘲笑している。ヘッドストーンは教師としての品性を保ちながら堂々と自己の立場を弁じるが、その言葉と裏腹に「すさまじい情念に駆られ……胸のうちには黒い殺意が渦巻いていた……彼はそれをはっきり意識していた。それだけでない——彼は荒れ狂う自分の心に刺激を与えてその疼きに一種倒錯した快感を覚えていた」(第二部第十一章)。抑制すべきことを理解しながら、感情がそれを許さない人間の抑え切れない情念の行き着く先は危険な犯罪行為となって現れる。

一方、ヘッドストーンの若い分身チャーリー・ヘクサムと言動は、教師の職業に罪があるような印象をさらに強める。彼は貧民学校に行かせてくれた姉にも、またそこで明敏で賢い点をヘッドストーンに見込まれ、レベル上の学校に行けたことで彼にも恩を受けていた。姉リジーとユージンとの関係では、最初恩あるヘッドストーンを擁護する立場に立って、姉の態度に怒る。それはヘッドストーンへの配慮からのようだが、自己の将来を計算した言行であることが分かる。「とにかく、僕は姉さんのために笑い者になるのなんかまっぴらだ……せっかく泥沼から這い上がってきたのに姉さんに引きずり下ろされるのはお断りだ」(第二部第十五章)。ちょうどヘッドストーンが家族を犠牲にして出世の道を歩んできたように、チャーリーもまた家族の恩を仇で返す中で上昇の階段を昇ろうとしている。

チャーリーの上昇志向は、その妨げとなりそうな障害を躊躇なく排除させる。ヘッドストーンがユージンへの犯行に関わりがあることを知っ

たチャーリーはかつての恩師に絶縁を申し入れる。「……ヘッドストーン先生、僕はこれからあなたの利己主義を曝け出してみせます。あなたの猛烈な、暴力的な、手におえない利己主義をね。僕はこれ以上あなたと付き合えないし、付き合うつもりもない」(第二部第十五章)。彼は今や「一人前の教師になっていて、別の学校の別の校長のもとにいた」とある。チャーリーは教師ということになっているが、同じ箇所では「少年ヘクサム」とも言っており、非常に曖昧である⁴²⁾。いずれにせよ、チャーリーは出世への階段を確実にしていた。ヘッドストーンが今や彼のさらなる出世の障害物以外の何物でもなくなった以上、彼との絶縁は必然と考えている。ヘッドストーンの利己主義をこきおろす本人の利己主義に対するディケンズ一流の皮肉が冴えわたる。

チャーリーに背かれ、リジーへの想いも届かないことを知ったヘッドストーンは、上品さを装った表面の下に潜む激情と動物的な本能を抑制できなくなって恋敵の殺害という犯行に駆り立てられる。それはそれまでの辛酸と努力を台無しにする可能性のある危険な行為である。ディケンズは上辺の上品さと矛盾する自己抑制のできない教師の姿を侮蔑と哀切の目で見つめながら描いている。一方、読者はこの男の内面とその行為の矛盾から男の職業との結びつきを見るよう誘われる。師範学校制度というしかるべき制度の下で勉学に勤しみ、「女王給費金」を授けられたエリート教師の生き様は、教師という職業とともに、師範学校そのものの批判を強く感じさせる。師範学校批判は、チャーリー・ヘクサムの利己的な言動によってさらに強められる。彼もまた師の分身として同じ道を歩む利己的な若者となっているからである。

一方、パブリック・スクール出身の若い弁護士ユージン・レイバーンは克己心や自助の意義を認めず、怠惰に日々を暮らしている。想いを寄せるリジーには間接的にしか自分の気持ちを伝えず、彼女を不安な状態に置いたままである。しかし、ディケンズは怠惰な上流階級者の欠点を最小に留め、リジーに対する誠実さに疑いはないことを友人モーティマー・ライトウッドとの会話の中で示している。スレーターは『ディケンズの遺産』の中で、ディケンズの後期の作品において人物評価は「誠実の有無」が基準であると述べている⁴³⁾。レイバーンの誠実さは下層階級の女性との結婚を貫き通すという点にあるのだろうか。しかし、レイバーンを通して示される下層階級出身者のヘッドストーンやヘクサムに

対するディケンズの侮蔑感は明らかである。庶民の味方を標榜するディケンズの姿勢は興味深い。

ディケンズは、師範学校卒業者のヘッドストーンとヘクサムを通じてまだ社会的地位の定まらない新しいタイプの教師の生態をその否定的な側面を強調しながら描いた——「家族の中でのねじれ、正式免許をうるための苦労、その取得に成功して生じる自惚れ、新たに手にした地位、対面を保つために自分の出自を絶ちたいという誘惑、汗を流さずに高い地位を享受している社会階層に対する嫉妬心等」⁴⁴⁾。ディケンズはこれらの否定的な側面を見事に描いて、ヘッドストーンとヘクサムを生きた人物としてはいる。問題は、ディケンズの二人に対する厳しい評価と彼らの背景となっている師範学校批判によって何を示そうとしたのかという点である。『辛い世』では師範学校の教授法や視学官制度への批判を明らかにしたのに対して、『互いの友』では師範学校出の教師の姿を通して、彼らの性格的な弱点を鋭く描いている。彼は師範学校制度にそのような危険要因が孕んでいることを察知していたのであろうか。師範学校出身者の性格的なことについては、当時からある程度問題視されていたようである。コリンズは彼らが「知識は一杯詰まっているが、どちらかと言うと活気に乏しく、しまりのない精神」の持ち主とする当時のある校長の証言を引用している⁴⁵⁾。しかし、この制度の推進者シャトルワースは既にこの問題を検討し、その対策を講じていたのである。彼は回想録『公教育』(*Public Education*, 1853) その他の中でその方策を語っている。ディケンズがそれらを読んでいたことは指摘されている⁴⁶⁾。ディケンズの小説とシャトルワースの著作の間にどのような関連が指摘できるだろうか。

師範学校出身の教師は将来どのような人格が求められるのか。師範学校生の将来的な人間性の問題に対応する方策をどう考えるか。これらがシャトルワースに課せられた問題の一つであった。バターシー師範学校でシャトルワースが生徒の性格形成を究極的な目標としたことは言うまでもない。彼の性格形成論はよく検討すると、ディケンズが『互いの友』で描いた師範学校卒業の教師像と深く関連していることが分かる。「第二次報告書」(*The Second Report on the Battersea*)の中でシャトルワースは次のように述べている。「師範学校の主目的は、学校教員の性格の形成である。これは我が国における先例とは異なった基盤の上

にバターシー校を設立する際に我われを導いた第一の理想であった」⁴⁷⁾。

「先例とは異なった」とは何を指すのであろうか。「第一報告書」の中でシャトルワースは師範学校出身者も勤める可能性のある貧民学校の教育について言及している。「貧困者が入る小学校での規律・管理・授業は、社会の中流ないし上流階級のそれと大きく違って来る……その違いは貧困児童の場合、孤児であったり、不幸や怠惰や犯罪によって貧窮状態に陥っていることにある……そのためこれらの児童は、その性格や習慣は歪められている」⁴⁸⁾。多くの児童が貧窮に起因する歪曲した性格の持ち主である時、対応する教師のふさわしい資質とはどのようなものか。シャトルワースの「報告書」には次のようにある。

自分たち自身の階級に対する大きな同情を彼らに呼び覚ますこと。その階級を無知の悲惨さとそれに伴う悪徳から救い出すように援助するのが、彼らの最高の名誉であるという考えを彼らの魂の中に植え込むこと。貪欲な目的へと駆り立てる商業社会の個人競争の影響から彼らを引き離すこと。不安で苦悩している群集の不満足な困窮を彼らの前に示し、その精神的・道徳的病弊を治癒しようという慈善心を彼らの中に息吹かせること⁴⁹⁾。

ここから読み取れるのは、(1)「貧民への同情心」、(2)「無知と悪徳から貧民を救済する使命感」、(3)「商業社会特有の個人競争の回避」、(4)「キリスト教的慈善心の涵養」等である。自己の出身階級への同情心の涵養を通して、低級な自惚れや虚栄心として表れる俗物根性を回避すること。自身貧民階級出身から教師として報酬の安定を保証されて中流階級へ入ることは、下層階級蔑視という偏見に晒される危険があった。ヘッドストーンはまさにこの陥穽に落ちた人物と言える。ヴィクトリア朝の小説が好んで取り上げたテーマでもある。とりわけ、ディケンズはこの構図を好んでいた。教育は貧民を無知と悪徳から救うという考えは、19世紀に特に広がった思想であり、教育理念の原点であった。ディケンズ自身も機会をとらえては繰り返し主張している。また、商業社会の悪影響を回避させ、教師という職業に金銭欲以上の動機で一生を捧げる必要性と「キリスト教的慈善心」とを結びつけてシャトルワースはこう述べている。「教員の道は、もし報酬目当の精神で入るならば失望で蔽わ

れる。キリスト教的慈善の精神で導かれているならば激励で満たされる。いかなる技術も、教員の性格や行為に浸透した宗教的精神の欠如を補うことはできない」⁵⁰⁾。これらの理念がヘッドストーンとヘクサム性格や資質と相反することは明らかである。

キリスト教精神を基盤とした性格形成論をシャトルワースはどのような形で実践しようとしたのであろうか。直接的には、バターシー校の日課表に見られるように、朝夕の礼拝、聖書講読、日曜日の教会への出席などを通して、キリスト教精神の体得を目指した。さらに、日々の学習では、「知性は良心を教える時啓発され、良心は知性を通して……より広い義務の領域をみつめ、知性の命令によってより大きな行動能力を持つ時啓発される」⁵¹⁾という趣旨から、知性と道德の両立を主張している。逆に言えば、知識の修得は正しい道德的状态のもとで行われる必要があり、知識の獲得の結果、虚栄心や優越感に浸る愚を警告する。シャトルワースは貧民層出身の師範学校生が、苦学の末に新しい地位を獲得した結果、体面を保とうとする余り出自を隠蔽したり、逆に劣等感の裏返しとしての虚栄心を持つことなどを警戒した。ヘッドストーンやヘクサムへの訓戒そのものである。社会の評価が未定の状況の中でそれは適切な配慮と思われる。シャトルワースが「先例とは異なる[教師像]」と言った時、彼は以上のような性格形成を師範学校生に求めたと思われる。

しかし、優れた理論も実践の中で成果をあげなければ、批判の対象となりやすい。ディケンズの師範学校批判は成果に対するもので、その理論や実践に対してはほとんど顧慮した様子はない。ディケンズは政府の責任者の努力を評価せず、教員養成というものが持つ大変な複雑さと困難へは目を向けず、訓練の必要性ではなく、訓練を受けるにふさわしい資質のある人物を選び出す方が重要だと考えていたようである。少なくとも、ヘッドストーンやチャーリー・ヘクサムの人物描写からはそう受け取れる。

結び

ディケンズは、二つの作品において師範学校という国家が主導した教員養成制度を批判した。彼の教育に対する従来の批判は、民衆教育における不適格な教師に向けられていた。『ニコラス・ニクルビー』の言語

道断なスクウィアズ、『デイヴィッド・コパーフィールド』のクリークルなどの悪辣な教師だけでなく、決して邪悪な教師とは思われない『ドンビー父子』のブリンバー博士や『デイヴィッド・コパーフィールド』のストロング博士など、全体に不適格な教師が個人的に槍玉にあがっていた。彼らは教師としての正式な訓練を受けておらず、その意味も考えていないいわば素人たちであり、不適格の烙印を押される可能性があった。しかし、『辛い世』と『互いの友』では、教員養成制度という公の制度に沿って生まれた教師の問題である。正式に免許を受けた教師、その資格が政府によって認められた教師である。不適格な教師では済まされない。政府の教育関係者の中でも特にシャトルワースは適格な教員の養成を目的とした師範学校制度を主導し、学習面のみならず、師範学校出の教師の人格形成問題にまで懸念を抱き、その解決のための方策を立てそれを実践していた。そのための努力は多くの者が認めている。ではなぜディケンズは二度に渡って同じ対象を攻撃したのであろうか。そのような姿勢をとったディケンズが「教員訓練のための師範学校の必要性を認めたわが国最初の人たちのうちの一人であった」⁵²⁾とするヒューズの意見には賛同できない。「シャトルワース的ナンセンス」という言葉からは彼の努力を認めようとする意思をディケンズに見つけるのは困難である。では、二つの作品で示した師範学校批判を通して、ディケンズは何を意図したのか、またその正当性はどこに見出せばよいのであろうか。

『辛い世』において、確かに、マッチョーカムチャイルドのように「詰め込み教育」や「実物教育」に熱心に取り組み、ただ生徒を悩ました師範学校出の教師が多く存在していたことは、1861年のニューカッスル審議会にイギリス各地から寄せられた報告にも明らかである。ディケンズの指弾はその限りにおいて正しいと思われる。もちろん師範学校制度における政府の責任者であるシャトルワースは既に考察したように、教育理念の中にそのような否定的側面を回避するための方策をきちんと盛り込んでいた。しかし、実態は彼が期待したようなものではなかった。ディケンズの批判は結果に対して向けられており、制度を立ち上げた動因についての理解には向けられていない。コリンズはそれを「[ディケンズの] 形式的な中産階級的ものの見方」だという。ディケンズの見解は、実態を正確に反映しているが、同時に彼独特の偏見も伴うものと言

える。

「第三の紳士」として登場する政府の役人についてはどうか。コリンズは、K.J.フィールディングの調査を踏まえて、ヘンリー・コールの「実用技芸局」への諷刺ととり、想像力 vs 功利主義という構図は作品全体のテーマに即したものであるとしている。一方マニングは、それを装いながら、視学官制度を槍玉に挙げたと捉える方が師範学校制度批判という点から一貫性があるとする。フィールディングの指摘を待つまでもなく、ディケンズの「ノート」に「モールバラ・ハウス原則」(‘Marlborough House Doctrine’) 次いで「コール」(‘Cole’) ⁵³⁾とある以上、ディケンズの意図はコリンズの見解に沿うものと思われる。コリンズに視学官についての説明がないのは不思議な気がするが、「第三の紳士」を視学官ととってもコールとしても、それぞれの職務からして、彼の発言は奇妙である。グラッドグラインドと全く同じ口調で詰め込み教育を主張しているのは現実の視学官の姿勢と相容れないし、「実用技芸局」の役人が教授法に口を挟むのも奇妙である。ディケンズは「実用技芸局」に師範学校制度をからませて諷刺しようとした、言い換えれば、事実をぼかして諷刺の効果を狙う彼独特の方法をとったため、一部齟齬を来たしたのではないかと思われる。

『辛い世』から十年後に書かれた『互いの友』でも、ディケンズは師範学校出身者の機械主義的教授法を批判する姿勢を崩さないが、この作品での彼の教育上の関心は、師範学校で訓練を受けた教師についての社会学的考察である。怠惰なパブリック・スクール出身者と辛酸の末新しい制度の下で教師となった下層階級出身者との階級的闘争、前者の下層階級の女性との結婚問題、後者の複雑な心理的葛藤、出世を目指す少年の利己主義、階級的壁に苦悩する下層階級の女性等々、作品の一つの流れを構成している要素は、階級問題と教師という職業と深く関わっている。ユージン・レイバーンとリジー・ヘクサムとの結婚は、それまでのディケンズの方法と違って、上流階級の男が身を屈して下層階級の女の愛を求めている。『ニコラス・ニクルビー』でケイトを籠絡しようとする貴族、『デイヴィッド・コパーフィールド』でエミリイを誘惑して捨てるステイアフォースなど階級差の中での男女の結びつきは不誠実なものであった。レイバーンに求めさせ、実現させた要因は何か。それは彼の誠実さということになるのだろうか。確かにレイバーンはリジーに対

しては誠実さを崩さない。しかし、ヘッドストーンに代表される教師に対する彼の姿勢は誠実とは言えない。ディケンズの姿勢もヘッドストーンを極端に劣等な人物に描き、レイバーンとの比較を読者に迫っている。ヘッドストーンは嫉妬心と怒りのために我を忘れて、それまでの辛苦を台無しにする非道に走ってしまう。彼の行動は彼個人の人間性に由来するにもかかわらず、彼の教師という職業に原因があるかのように描かれている。利己的な彼の分身チャーリー・ヘクサムの利己的な言動がその印象を強めている。

コリンズが指摘しているように、ディケンズはヘッドストーンとチャーリーなど下層階級者の自助の努力を認めず、生まれた階級の生き方に甘んずべきであったとでもいうように、ヘッドストーンについて漏らしている。「もし、若きブラッドリー・ヘッドストーンが、貧しい青年時代に海の仕事に就く機会があったなら、下級船員で終るようなことはなかったであろう」(第二部第一章)。もしヘッドストーンが教師としての適格性を生来もっていなかった、また性格形成を怠った師範学校出身者には彼のような不適格な教師が多いというのがディケンズのメッセージであるとすれば、彼の言う適格な教師像はどのようなものか。マニングが回答の一つを提示している。「ディケンズが考えていたように、教師になるためには訓練が必要であるということではなく、むしろ立派な人物で幅広い能力のある人が必要で、さらにそのような人に紳士たるにふさわしい訓練を施す必要があるということである」⁵⁴⁾。この見解が妥当かどうかは、彼の作品に描かれた数多くの教師たちをさらに分析し考察する必要がある。

注

- 1) テキストには *The Collected Works of Charles Dickens*, (Chapman and Hall, 1900), 35vols を使用。
- 2) John Manning, *Dickens on Education* (The Toronto University Press, 1959), p.141.
- 3) *Ibid.*, p.129.
- 4) See Paul Schlicke ed., *Oxford Reader's Companion to Dickens* (Oxford Univ. Press, 1999), pp.210-11.
- 5) See Manning, *op. cit.*, pp.130-31.
- 6) 三好信浩『イギリス公教育の歴史的構造』亜紀書房刊 1966年 250頁。

- 7) 田中孝信他訳『ハード・タイムズ』英宝社 2000年 18頁 注5。
- 8) ‘pupil teacher’の呼称については「見習生」の他に「助教生」が用いられている。‘monitor’と区別する意味でここでは前者を用いる。
- 9) See James Kay-Shuttleworth, *Four Periods of Public Education* (Longman, 1862) repr. Routledge, 1993, pp.328-29.
- 10) Madeline House et al., *The Letters of Charles Dickens* (Oxford, 1974), Vol. VII, p.258.
- 11) 三好、257頁。
- 12) Shuttleworth, *op. cit.*, p.488.
- 13) See *Ibid.*, pp.328-29.
- 14) Philip Collins, *Dickens and Education* (Macmillan, 1963), p.151.
- 15) Mathew Arnold, *Reports on Elementary Schools 1852-1882*, ed. Francis Sandford (1889), quoted in Philip Collins, *Dickens and Education*, p.129.
- 16) See Collins, *op. cit.*, pp.152-53.
- 17) 三好、159頁。Shuttleworth, *The Second Report on the Training of Pauper Children*, pp.150-1. より引用。
- 18) 同書、160頁。
- 19) Shuttleworth, *op. cit.*, p.320. 三好、194頁。
- 20) Collins, *op. cit.*, p.149.
- 21) シャトルワース宛1846年3月28日付書簡参照。Madeline, *op. cit.*, Vol. V, pp.526-27.
- 22) Schlicke, *op. cit.*, p.210.
- 23) クーツ女史宛1856年12月9日付書簡参照。Madeline, *op. cit.*, Vol. VIII, p.234.
- 24) 三好、152頁。
- 25) See Shuttleworth, *op. cit.*, pp.207-49. シャトルワースはヨーロッパ視察(オランダ、スイス、ドイツ、フランス)での教員養成学校の実態とスコットランドでのウッドヤストウの実験学校から師範学校設立の意義を確信したと思われる。
- 26) 「実用技芸局」(Department of Practical Art)は1852年に Marlborough House に創設されたもので、初代所長は Henry Cole。技芸的なものも装飾を廃して実用的でなければならないとした。ディケンズはこれに反発したが、彼とは知己の間柄であり穏やかに批判した書簡(Cole 宛1854年6月17日付)が残っている。Cf. J.K.Fielding, “Charles Dickens and the Department of Practical Art,” *Modern Language Review*, XL VIII, 1953.
- 27) Collins, *op. cit.*, p.157.
- 28) Manning, *op. cit.*, p.141.
- 29) 三好、292-93頁参照。
- 30) J.S.Harris, *British Government Inspection*, 1955. 三好、293頁。
- 31) S.Webb, *English Poor Law Policy*, 1910. 三好、294頁。

- 32) 三好、241頁参照。
- 33) 同書、298頁。
- 34) Schlicke, *op.cit.*, p.211.
- 35) *Ibid.*, p.211.
- 36) Shuttleworth, *op.cit.*, p.290.
- 37) See Philip Collins, 'Dickens and the Ragged Schools,' *The Dickensian*, Vol.55. 1959, pp.94-109.
- 38) See 'A Sleep to Startle us,' *Household Words*, March 13, 1852. ディケンズが最初に視察した West Street, Saffron Hill の貧民学校の描写と多くの点で類似している。
- 39) See Manning, *op.cit.*, p.60.
- 40) 「師範学校一覧表」によると、国庫補助を受けるようになった女子師範学校は1851年以降主要都市に設立されている。三好、320頁参照。
- 41) Collins, *op.cit.*, p.160.
- 42) Collins もチャーリー少年の師範学校（別称 Training College）時代の描写が省かれていることを不思議がっている。シャトルワースの師範学校構想では見習生から数えると8年かかることになるが、そのような時間経過はこの小説では感じられない。他の作品にもしばしば見られるディケンズのミスとも考えられるが、チャーリーは「助教生」あるいは「見習生」であった可能性もある。
- 43) Michael Slater, *An Intelligent Person's Guide to Dickens* (Gerald Duckworth, 1999), p.64. 邦訳 佐々木 徹『ディケンズの遺産』原書房 2005年 117頁。
- 44) Collins, *op.cit.*, p.168.
- 45) *Ibid.*, p.169.
- 46) ディケンズはシャトルワースの『公教育』（*Public Education*）を読み、一覧表や統計的数字に辟易したことをクーツ女史（Miss Burdett Coutts）宛書簡の中で述べている。See Madeline House et al. *The Letters of Charles Dickens*, Vol.VII, p.56. しかし、1862年に出版されたシャトルワースの *Four Periods of Public Education* には彼の公教育に対する理念や実現への経過が詳細に述べられており、ディケンズのシャトルワース観は偏ったものと言える。
- 47) Shuttleworth, *op.cit.*, p.399.
- 48) *Ibid.*, p.297.
- 49) *Ibid.*, p.309.
- 50) *Ibid.*, p.358.
- 51) *Ibid.*, p.298.
- 52) James L.Hughes, *Dickens as an Educator* (University Press of the Pacific, 1903), p.7.
- 53) Harry Stone, *Dickens' Working Notes for His Novels* (The University of

Chicago Press, 1987), p.253.

54) Manning, *op.cit.*, p.151.